

第3回 福島国際専門家会議  
放射線と健康リスクを超えて～復興とレジリエンスに向けて  
Beyond Radiation and Health Risk—Toward Resilience and Recovery  
September 8-9, 2014, Fukushima



■第3回福島国際専門家会議に参加する山下氏

# 放射線リスクを正しく理解する大切さ 覚悟を決めて伝える

1952年、長崎県で生まれ、被爆2世でもある山下俊一氏が被ばく医療に携わることになったきっかけは、育った環境が大きく関係している。

アルバート・シュバイツワーや永井隆、野口英世などの有名な医師に憧れ、医学の道を目指した山下氏。長崎大学医学部を卒業し米国留学を経て、長崎大学医学部教授として原爆被爆者の健康影響について研究した。甲狀腺がんの専門家となっていた山下氏は、原発

事故後の医療支援と健康影響調査に携わって欲しいというソ連からの依頼を受け、日本からの派遣団の二員として1991年にチェルノブイリを訪れた。そこでの活動が高く評価され、WHO（世界保健機関）へ出向した山下氏は、さらなる実績を重ね、世界的に有名な放射線リスクに関する専門家となったのである。帰国した山下氏が、2011年3月11日に起きた東日本大震災後、福島県知事の要請を受け、同県を

訪れたのは3月18日。山下氏は震災直後、「自分の出番がくるのは、しばらくしてからだ」と考えていたという。しかし、状況は違った。「実際、現地の大学の医療関係者も混乱していたし、国の危機管理も後手後手の状況でした」と語る山下氏は、事故発生から1週間後、現地に入ったのだった。

山下氏の任務は、情報氾濫の渦中で、放射線に対する正しい知識の教育であった。医療従事者や専門家への講義だけでなく、住民へも「科学的根拠をもってリスクについての正しい知識を伝える」ために講演を重ね、より多くの人が情報に接触する機会をつくるため、メディアへの露出も増えた。

また、後継者の育成が急務であると考えた山下氏は、福島県に住民票を移し福島県立医科大学副学長として活動を展開。旧ソ連での人材育成の経験を生かし、同医科大学が国際的な被ばく医療の研究センターならびに教育拠点となるように尽力した。長崎県に戻った今も福島未来創造支援研究センター長を務めている。

チェルノブイリで活動して

## 教育者部門(国内)



やま した しゅん いち  
**山下 俊一**  
Shunichi Yamashita  
国立大学法人長崎大学  
理事・副学長  
Trustee and Vice President,  
Nagasaki University

推薦者 紀伊國 献三 公益財団法人笹川記念保健協力財団 会長

1952年長崎県生まれ。国立大学法人長崎大学理事・副学長。1991年より、4半世紀近く旧ソ連圏における「核に汚染された大地」で医療教育事業と国際学術共同研究を推進。1995年からカザフスタン・セミパラチンスク核実験場周辺への医療支援も手がけ、2004年にはチェルノブイリでの活動が評価され、WHO（世界保健機関）に出向し放射線プログラムの専門科学官として勤務した。2006年に帰国。東日本大震災後の2011年には、福島県放射線健康リスク管理アドバイザーに任命され、福島県立医科大学の副学長も務めた（現在は非常勤）。



■震災直後、医大で共に働いた仲間たち

いた頃、放射能が胎児におよぼす影響に大きな不安を抱える現地に、「私も被爆2世ながら元気です」と伝えたところ、安心感を与えることができたという山下氏。自身も意識したことがなかった「被爆2世」という言葉が持つ大きな意味と影響力に気づき、また、先入観や誤解から危険を恐れる人々に、科学的根拠に基づき、正しい放射線リスクの知識を伝える大切さを学んだという。

ない現代リスク社会にあり、困難に立ち向かう勇氣が不可欠との信念がある。チェルノブイリでの経験から、福島県での活動が長く困難を極めることを当初から予測していたが、それでも「誰かが負の遺産を引き受けなければ」と覚悟を決め、東奔西走の日々を歩んでいる。敢えて、険しい道を選ぶ。山下氏は、憧れていた医師が通って来た道と同じ道を歩んでいる。